2016年5月24日

　酪農学園黒澤記念講堂

「希望を捨てず」

ローマの信徒への手紙5章1～5節

金井　創【佐敷教会牧師、沖縄キリスト教学院平和研究所ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】

　沖縄に赴任して10年になるが、その当初から辺野古の問題に関わってきた。

　在日米軍基地の74％が、日本全国土の0.6％の土地にある。しかし、実は、海域や空域にまで広げると、米軍の制圧権に取り囲まれているのが現実である。

　辺野古の海を埋め立てる計画だったが、珊瑚や魚介類、ジュゴンなどそこに成育するものを生き埋めにする行為であることを忘れてはならない。

　基地建設に抗議する活動を続けているが、圧倒的な力の差の中での活動だ。国家を背景に持つ相手に対して、ボランティアの集まりでしかない。しかし、最近、沖縄県民の意志が集約されてきていることを感じる。

　ずっと不毛に見える抗議を続けてきたが、裁判所の和解勧告を受けて基地建設工事の中断に至っている。これは本当に大きなことだ。

　文語訳の聖書に「せんかた尽くれども希望（のぞみ）を失わず」という言葉がある。やるべきことはすべてやり尽くしてもう何もできない。それでも希望は持っている、という不思議な言葉だ。聖書は、苦難から忍耐、練達、希望が生まれると説くけれど、簡単なことではない。今、たどり着いた状態は、まさに文語訳の聖書が示すように、やりつくした果てにある希望の状態ではないだろうか。あきらめずに希望を持ち続けたい。